紀續古文英華 下

特別
ヲ9
3914
4

神
門ラ9
3911
巻№4

續たとふき草

たい鼓の鳴をまく何といふことぞ

る術

たい鼓と鼓とを和き寄て。ひなりをとハ何と
いふことなりしまし。先賢人ハ戸よりも。
唐紙よりも。障子みよりもたてきり。間を隔て
う。又ハあひをよをとき。扨其つゞきを打人よ。誰よて
も。或ハ人の名よりても。又ハ何よりも沒ふき紙よ書

付改めて渡す。其人これをよこてはよいハず
よ其紙を書こる人へ戻し。扨右鼓とくぐこ
とをうけなり。此書とかの藤丸間よ居る其人
ぎやうとして何といふてなりといふてちがふなし。
此右鼓つぐこの書よ其やうあり。たこつぐこの其やう
よあひりんあり。代接ハたの書と見てきまへ
さうさま人屋
一いろはにほへと

二ちりぬるを五わか七
三よたれそ四つ五ねな七
四らむうゐの五おくや七
五やまけふこ五えて七
六あさきゆめ五みし七
七京ひもせす五
人寄りて其人よ。たとへバ花ざうと書て見せ
ゝうゝバ。右鼓を一ッうちつぐこを三ッ打これ(は)の

字とあるべし。此ゆへハ右の歌の
あるいろはの上此一ッなり。此一ッまて[いろは]の
下りとすべきなり。次よつゞを三ッうへまて
いろ(は)の字とあるなり。又右歌を三ッうへ
これいちよおれバ[よたれ]のりとしる。
次よつゞをセッうへこれ(な)の字なり。又右歌
をたッうへいちよらやあこれ[あさき]の
りとある。次よつゞを三ッうへこれあ(さ)さ

の字なり。又右歌を三ッうへこれいち[らり
ぬる]のりとある。次よつゞをセッうへこれ
ちりぬるをわか(か)の字なり。又右歌を三ッうへ
みこれを[ちりぬる]のりとある。次よつゞを三
ッうへこれちりの(り)の字なり。うへて[はか
ざり]とあるなり。こゝまて右歌のふちをか
らくとるすべし。これ一切くの句ぎりあり。
一ゝつゞばうよてうへよハ右の右歌のかりを

大きくうち。つぎこれところと。やちりつぎこて
ふさくかあり。たい鼓ばうよてかもこれはおな
一又ち鼓つぎこかきこきハ。鳥のまゐと猫の
まねとよてするなり。こと〳〵ハあふぎと書て
出しこまゐ。いちよらやあとかゝすのま
ねをたこ京するなり。つぎよ猫のまねを一字
するなり。これ㋐の字ときくなり。扇鳥の
まねをいちよらやと六字して。猫のまね

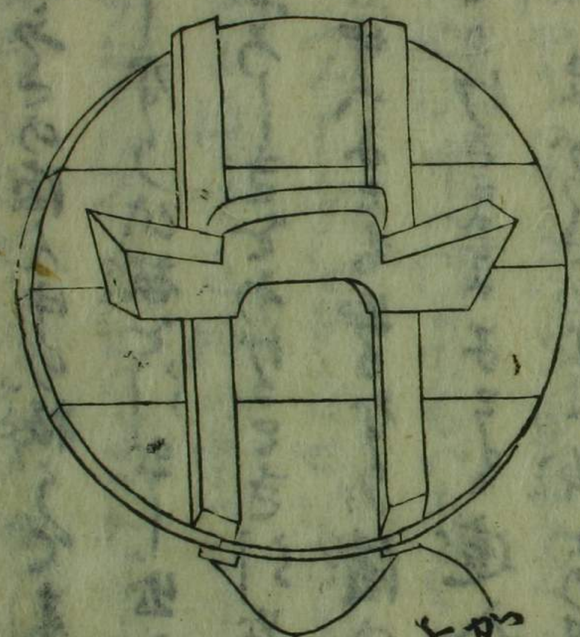
をやまけふと四字する。これ㋒の字ときく。
扇鳥のまねを六声するこれあさきのりと
ちる次よ猫のまねをあさきと三声するこれ
㋑の字なり。よりてあふぎと云るなり
一又箏盤よてちる法あり。あふぎといふことを
いハよハ六五字とをくこれたくりめの一字めと
㋐の字なり。ふハいちよらやあたりめたな
なり。字ハたりめの一字といふことなり次よ五四字とをく

なり。ふ五ハいちよらやなれバやまけのてり
乃四字めとゐふことなり。やまけふ四トハふの
字なり。次よ去ヲトとをく。これ去てりめ
三字めとゐふことなり。(き)の字なり。よりて
あふぎとちるなり。其外頭吹と火入とを
てきくも同じことなり。これを他ん通こゝ
泉ちの偽り物乃ちゐ人のよれバ志げこ
人のけけハうゝむ術

たとへバ焼物よてを本よて偽りてゐちゐよて
を。害人ちどある日をのきと独り浮沉す。
法ハ。其ちゐの首を細き糸よてそり其糸の
はしを鯉よくてりをき結へべし。人近づけを
鯉志げむよりくちゐるも志づこ。人をのけ
鯉うゝむよりくちゐるもうゝむゆへ。害人
えて寄めよおりへなり
子ども釜ぬけの法

まくのよう大釜をのせ。此大釜の中へ十二歳
ぐらいのこどもを入。ふたをして。ふたのあうぬ
やうにまくをぬきを入。鎖をおろし。ふろしき
ときせ。幕ぎハまでひき付。ふろしきをとり。鎖
をあけるふ。中より人なし。ふたもうちうへしてえ
せ。釜もうきてえんせ。扨ふたをしてくりん
ぬきを入。鎖をおろし。ふろしきをきせ。
此中よりこどもいでぬとしてふろしきをと

まくえんぬきをとれば中よ
りこどもあらわる。此仕やうにふたをあけあり



ふくろの内中の板。うで木のずんどう引出
しなり。此板をゝ出し。出入をさするなり。初
ふろしきをあけるとき。引出しとぬいくまく
の中へよごれも出るなり。後の時ハふろしき
とうけさまゝよろしく這入なり
まるいもの上ハ桶をのせく出。此桶の中へ
麺よても。又索麺よても。其外長くの物
を出す術

まる板の上ハ大きなる桶をのせく出。此桶の
中へ右の長く何よても。是を次第桶の中へ出す
仕やうハ。まるいもの上ハよくぬやうに。引出しを
仕込。此中へ何よてもいろく入をくなり。桶の上
へふろしきをすきさせ。此引出しより何よても
長よ海せ。さ桶の中へ出てゝ見せ又ふろしきを
すおかひてまるいもの。引出しへ入しまひ
ふろしきをとりて見せしまゝなり

大豆の品

まず人のまゝざるやうに大豆と四粒口中に含ミおく。亀川より豆のごとく豆と一粒とき。此一粒をも粒よなして見すべしといへく。扨其一粒の豆をつまこゝろ口中へ含むとゑんせてやうよれうちよかゝ拵。扨口中よりある豆と一粒とき出し。右のあまて吐出しうる豆をとりたの指をそへて瓜をふりちりとなし。まるやうよ見せて瓜右のゆび指よ一粒づゝ一粒となして出す。ひうちを一粒つまこゝろ。又口中へ入るまねをして入ずよかゝ拵。扨口中の豆を一粒出し。そをもつまこゝろ。又右の瓜と瓜をふりちりとなし。二ツよるやうよ見せて二粒となし出す。又一粒ゝり口中へ入るゝとして入ずよかゝつまこ拵。又口中の豆を一粒とき出し。それをもつまこ拵。又瓜と瓜とをふ

ひらとなし二ツよるやうよこせて二粒と
なす又ひうちを一粒とり口中へ入るまねをして。
口中よりある豆を吐出し。これをとり二ツよる
やうよこせて出す。これよて五粒よなるあり

虹をあらハす法

月乃西の山ハ端よりさしふきする時あをを口
中よ含て。霧乃ごとく。空よ向ひて吹
出すべし。ひろよ日映て忽ち虹をなすあり

夏の比産婆へ雪をとらす法

雪のふき出雪をとらすきへうす法八豆腐の湯
の注をすくひとり。固よて色をあふぎ起すべ
しちりぬれく産婆へ渡るありさま。ま
ことの雪ごとし

茶碗の底なる滓をとへすけて見ゆる法

茶碗よ濕乃ある地ふき出をる法

茶碗よ滓を一ツ入。産婆よ居る客人の目よ

茶碗のうちれ蝿乃足くね紙よをのけをくゝ。
此底なる蝿をくゝる足ゆる法。此蝿の入るゝ
茶碗のうちへ水を入まへ。今まで足へゞる蝿忽
ちゆ足ゆ半ぬなり。湿の多きぬ。ころかどを
くてもゆるなり。此法よて湿のある此なきを志
るべし

紙よて作る人形ひとり歩り法

紙を切て小き人形をこしらへ大きなる蝿を一疋

とゝへねをぬゝずする蝿の背ゝ糊をつけて。
の人形をつけをけば人形ひとりあるくなり

鶏卵ひとりおどり虚空をさして飛術

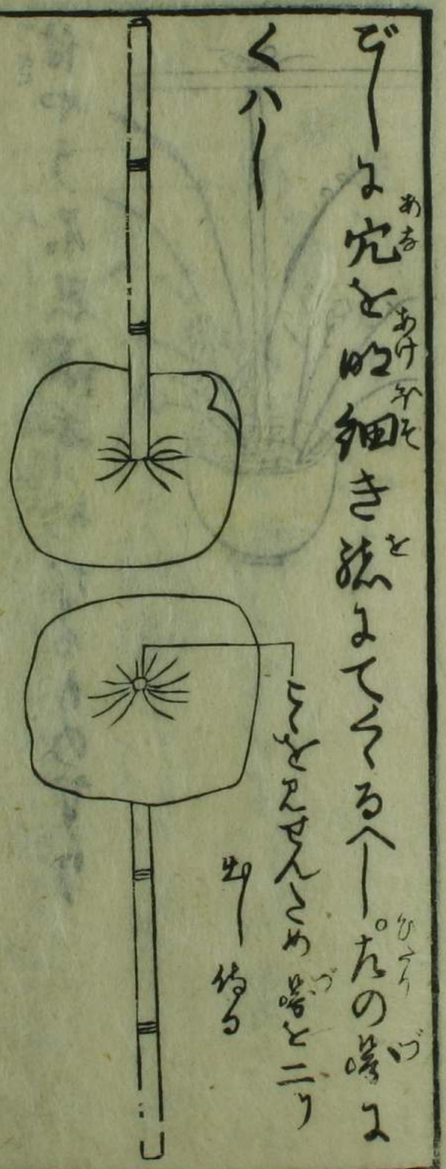
鶏卵よすこし穴をあけて。中を吸てとり。其あと
へ酢を入とき。翌日其雞卵のゝとをしづ
ゝきとりとへば。うすゝえ ばとりあがるなり。これ
を穴のところを吹へ入れるなり。これを宵
よすゝきゝ掘りの中へ入をけば。翌日の出るとき

つるくしと橋熟ふとつゝひのゞり。繁末と離れく虚空よりぬゞり。り清志れずあるなり。甚きゆうぬなるものゝ形り

磁物の釉よりても。ハ茶碗よりても。らう竹或ハ竿ハ竹ハ竹より即産より物産生をとらへ

産を生る法

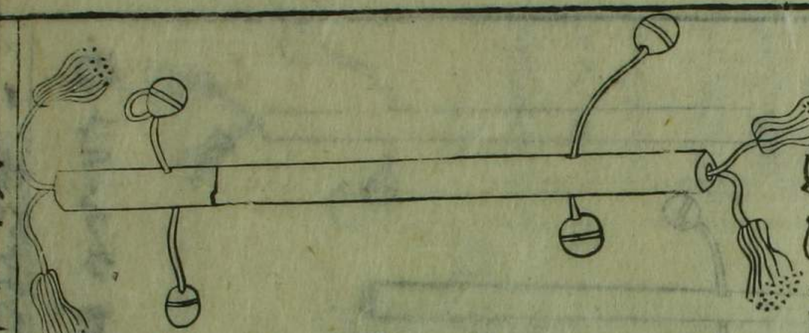
厚紙をらう竹の竿の油の先へ付るなり。付やうハ油の先へ紙とあて分中かどの所より紙



ぢゝより穴を明細き孔よりてゝるへ。たの嵜よくハ

紙と茶碗のうちの底へあるよ志めてひゝりとつゝ但し茶碗のうちつゝむ分ゝうすつゝよる紙のあるゝ上ハ表上へ表と紙の見くぬかどまれ入ようく拭よておしつけ。ゝく

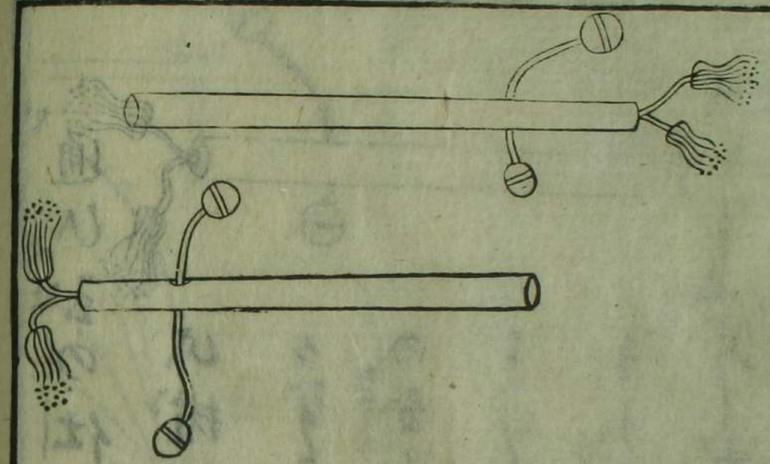
ひいらと付るとき。紙のかくれるかど物を入。
付よてもけ〳〵の花まなどさし入べし。
花瓶より他よ穴を明て糸を付。花茎の
間などよ引をくなり。糸〻の一端ありて。他の
付やう不思議奇妙なるものなり



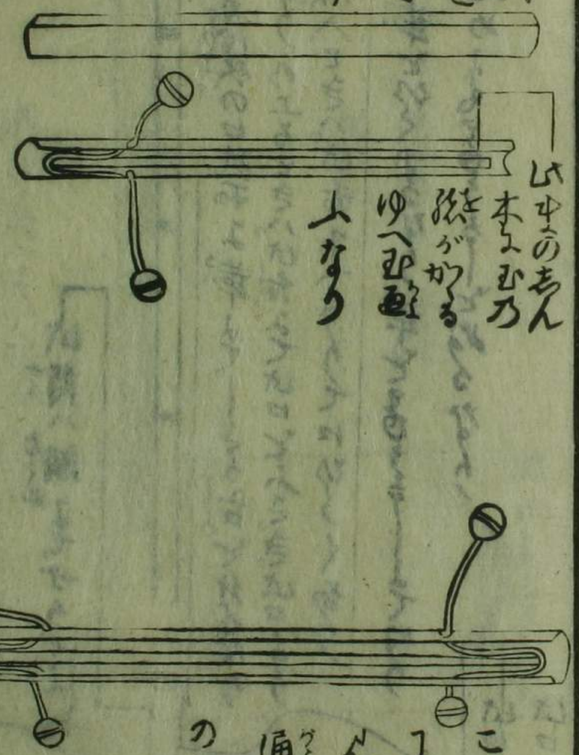
通ひ玉の仕やう

此緒を横よすくよ引バ横よ引
らなす。節遠て引ハあちゝ此方
のむ結ひけなり。夜よかなひむ
とりよ。筒ハ二ツよて一方ハ中へ
さし込。別てなるよ糸のかすよす
うぎあるものなり

ぬきうらときハたの筒ぶくろ



ちうけハかそき方の筒乃中ゑ竹のけんまと入をくなり。ぴたんまゑむのいとかくるゆへゑ四方へ通ずるなり。いとハ本綿糸よし



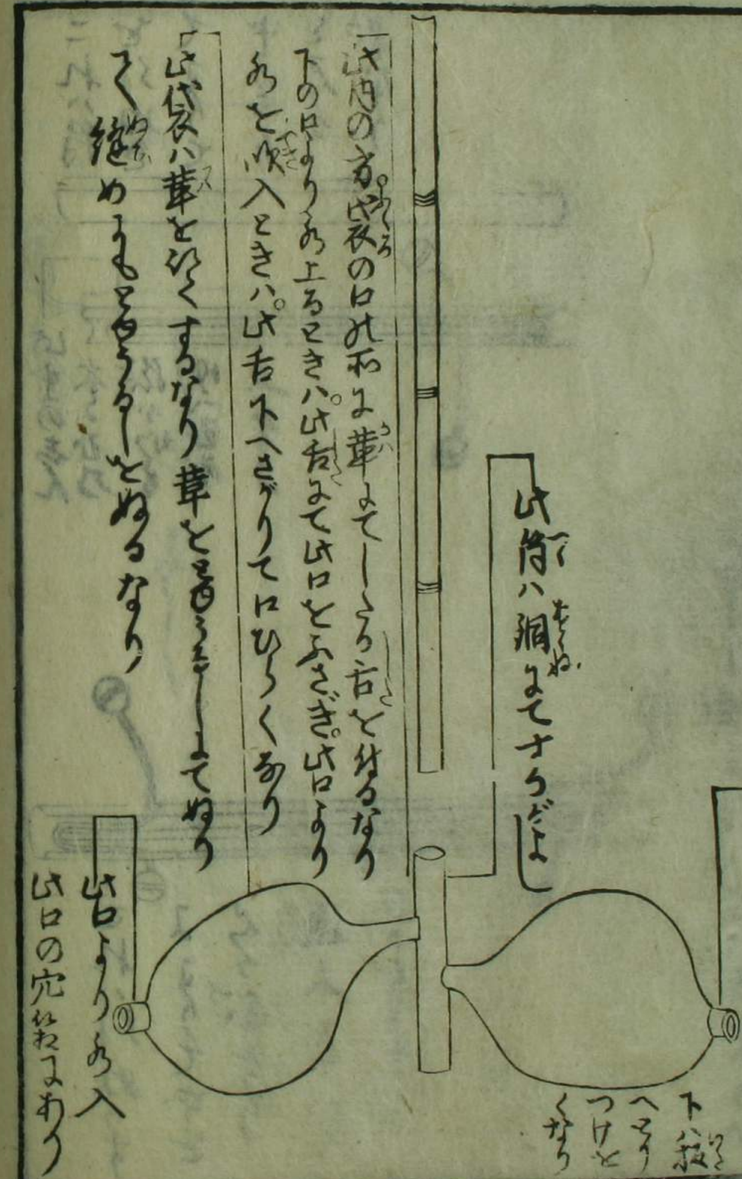
これハ竹を引ぬきてとりて中のたけを入るゝ筒なり

ぴたんの方ハ本ゑむの紙がかるゆへゑ四方ゑ入なり

これハ引ぬきすゑとりて中をゝゝ筒なり通入るすかくのゝ

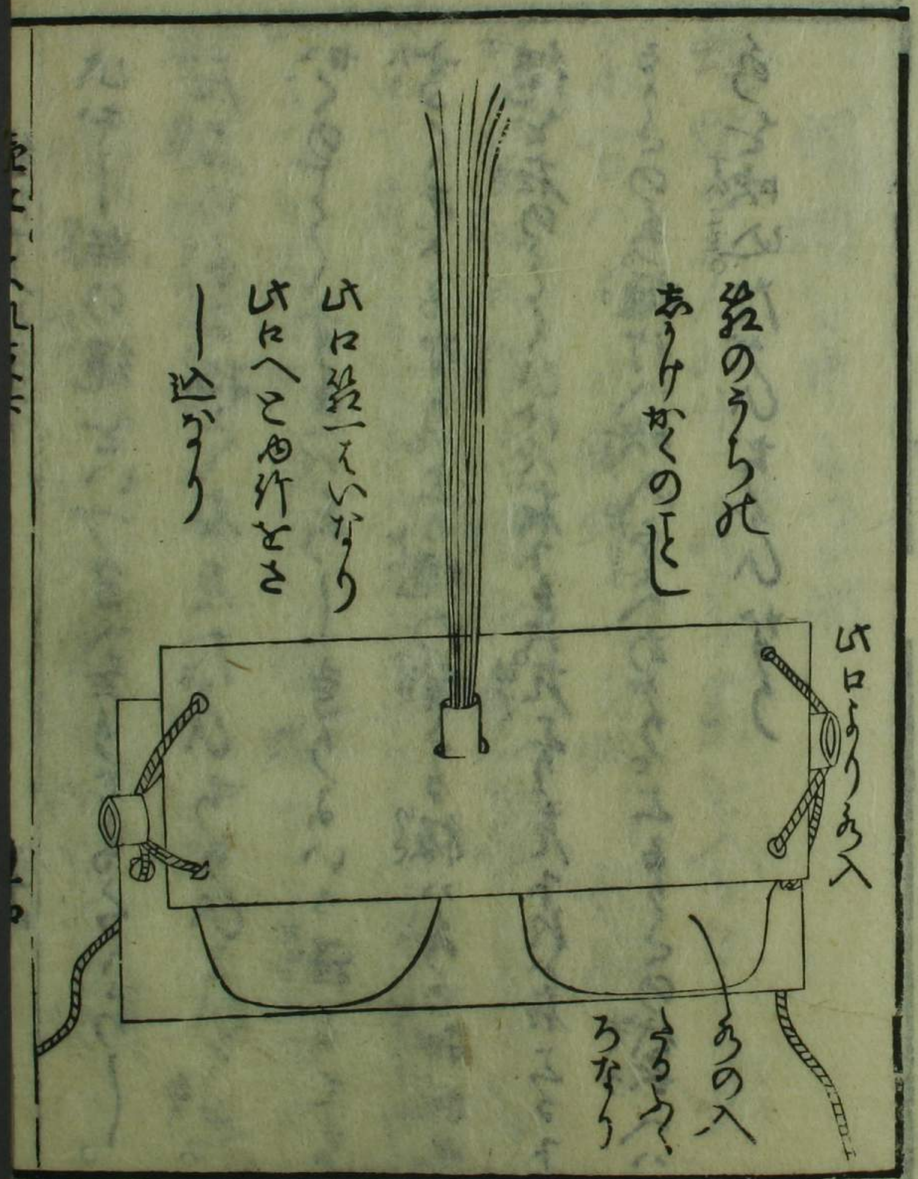
かやうゑ横ゑ引バ右の方の下のむ乃紙ゝゝぐくなるなり

卧龍竹を掬へる法



竹の内の方袋の口ハ紐より葉よりしーふる古と分るなり
下の口ふくろあり上るとき竹ハ竹をよりて口とふさぎ口ふくろ
あり上とき竹入ときハ竹ハ竹下へさがりて口ひらくなり

竹袋ハ葉とひくするなり葉と竹とをしーふてぬ
く絶めるもふくろとぬるなり



ひおし板の縄をいづ方へありともくらし。
左右のよは拍く。右左たたびひちぐひよひくも。
かくのごとくすきバ。ふしきりよいう極よても
言くあがるなり。上の縄乃紙る板ハふの押物也。
縄を右のごとくひけバ。右下きわ。左よりたれハ右よるト
るゝとのふ。樋行へ吹入。穴へわぐり。上るゝとの袋へハ
ふを吹込。たゞひちぐひなり

蠟燭を中よつる術

蠟燭のもんぜ中へ。庵うゝ薬を入るなり。其
薬方ハ　水銀蠟一分白地ゑ龍脳三分
ひこいろをふ銀よて煉合もんの庵うゝくく
つめて。庵の方と薬乃出ざるやうよつめをき。い
つよても火と點すべし。蠟燭中よてとゞる
寄ぬなり

蠟燭の火吹けしとの色と性こかる術

蠟燭の火をよをおりへて吹消よさいそくとも
る術はうけ木いをのむしいをのむなの付るところを
□これかどよしてたのよれうちよかう。拾
よはさみ拾。扱らうそくれとりロを。あよよてお
かひいをのとかよらうれと火うつくとそのそきく。蠟
燭と吹けし。其つけ木よ付る火いとの先ゆへ。
あしもあり又くぬりのなり。これとさいそく
ともすべし。うしぎなるのあり

蠟燭の火外の燭臺の蠟燭へをのれと
うれりこのる術
先産姿の燭臺よ。らうそくとどがしー玉。其外よ
又こがさぐるらうそくを燭臺よ立く。産姿へ
おー玉。扱又其間中かどよきよ。燭臺ばうり
をおーをき。勝ようり蠟燭よ火ととり。拾さ
出。この燭臺へ立海よ。ようてよのうちよつけ
ぶいをいをのとかよ付るを□これかどなる

を指のまさよかゝ〜ゝさみは。右の蠟燭を燭
臺よ立さ爲よ人の見ざるやうよ。いをよ火をつけ
ゝ。いまあるこの蠟燭へ火がうつりゝとゝいふて。
うの間まかどまきなる蠟燭へ。あよをおかひ。
火をとゝすなゝ

鞠を稽古せざる人よても自由よ曲まりと鞠

術

曲まりゝ法ハ。鞠よ志りけの伝受あり。ぞりの中
へ糸線を入るものなり。ぞまりよてい素人
よても自由自在よさまくの曲なるりの也

衣服ながゝ袖ゝより襟へ細〜しを通
て。細〜しを結び。結びめよ封を付てをく也。
封を切ゝずよ下糸を上へ糸へ出る術

ぞ術ハ一間へをゝり。人の見ぬやうよ帯を解
其細〜しよてをゝうる方の袖ゝより。下糸ゝ
袷よても。帷子よても。肌着よてもあれ。袖ゝよ

りゝ出し。上へとくと考て。おびとして。
其間より出るなり。人を寄ぬる男人をのゝ
うつむけてあるかるゝと。絵と足ずゝ紙と
いふものをもる 御
かるゝとをもうつむけおぐゝどこなりとも。まん
中を云念云恐よ指よて突出し。一枚人ぬうせ。
ぬきゝる人。絵とよく足てのち。おろる人の足
ぬやうふせなぐゝかるゝの上へゝさねるを切

ませ人よも切ませさせてうけれ抜あとむけ
ゝりて一枚ぬきたまへこれなりとゝりて
て出すなり。この御ハ神よ上の絵をゝく足
ゝりをきてうつむけりち。どこなりとも人よ
一枚ぬうせ先の人絵を足くのち。うつむけお
ぐゝ。紙おの。よよ指ゝるかるゝの上へのせるなり。
其時切ませるうゝとして。かの人の足くゝ
かるゝの上へ。我神よ上の絵と足ゝりときゝる。

かるこのかさあるやうにして。板きりまぜ人よ
も切まぜさせてうけけり。あとむけてうりて
足てをぢめ紙足をきる糸の上一枚ゞ。人
乃足くときこるかるとこれるなり ずいぶんと切まぜる
も二枚ちゝさ一ツ
まわりのなり
這人くあるく人よ細引と付て引と
めんとするよ。幾人しても止められ
ぬしやう

人よ銭部費みを口よ加へさせ。匍匐よ這人
てゞを。其人の腰よ細引を付て。二人して
力を出しひくよ。ひきとめること叶ハざるのこと
腰の上よ拍をのせる大力うけ男に仕れ
あをむけなり。よ足を巻よつきてをり。腰
のよ板を巻拍をつむよ。十人ゑこの力あ。
人を。四十貫ばかりハ乗るりの也。めし力量を
れが人るよのりて。其をの上の板乃上へたゞり

ても蟄りの也 腹よりのせるこ
結匂うつむけよ くハひしげる也
紙よて作りる舟 毒の上を独りゆく体
紙よて私を作り。此私の底の下より出を入をゝ
なり。ふゞ出かどなる大きさの出う。小き私
ハ蠅よてもう。此出の沓へのりを付。此私を付
をくべし。出ハえくすして私げうぎなるも
れなり

龍泓玉と拵る法

仕ゝ場の如し。先ずうろこぬやうよ。そゝき石
桶よみを入る。それうり吸出此かゞ樋 ところてんやよ用る竜の口という
のこをうりみを吸出ー流し。其流口の樋を
なり
地よ埋め。それより床末の見え中へみを通し上
但し床末の見え地へ埋ひべうず。衣形の柱へむけくみを上。
つい石原このやうよえすべし
但し此衣形と床末とのるよ玉石わり。赤間関石
よて硯よするゝがよし。小刀よても穴わく毒なり。此

穴ゟり衣桁の足ゟ穴ありく。柱へひけく上り衣桁
の上の横木ゟり。右の方れ絢紐のゟおひすびれゟか
れ紐の中に為の通ふ乃ゟり。うすき皮とゆうるし
よてゟり細くぬふく。
紐の中へ手こめ山中と通り。蕨ゟの張瑜のくゝ乃
ゟりのなり
中ゟくゝうとろよて。山中へあつゝひて四ゟり流
出るなり。素ゟる為の入るむハ阿蘭陀細工よて離も
のなり。為ハ一すゝてかゝくの柱ゟりかゝ
なり

若紙武帝　紅比奈三帝　草摺引ゟ

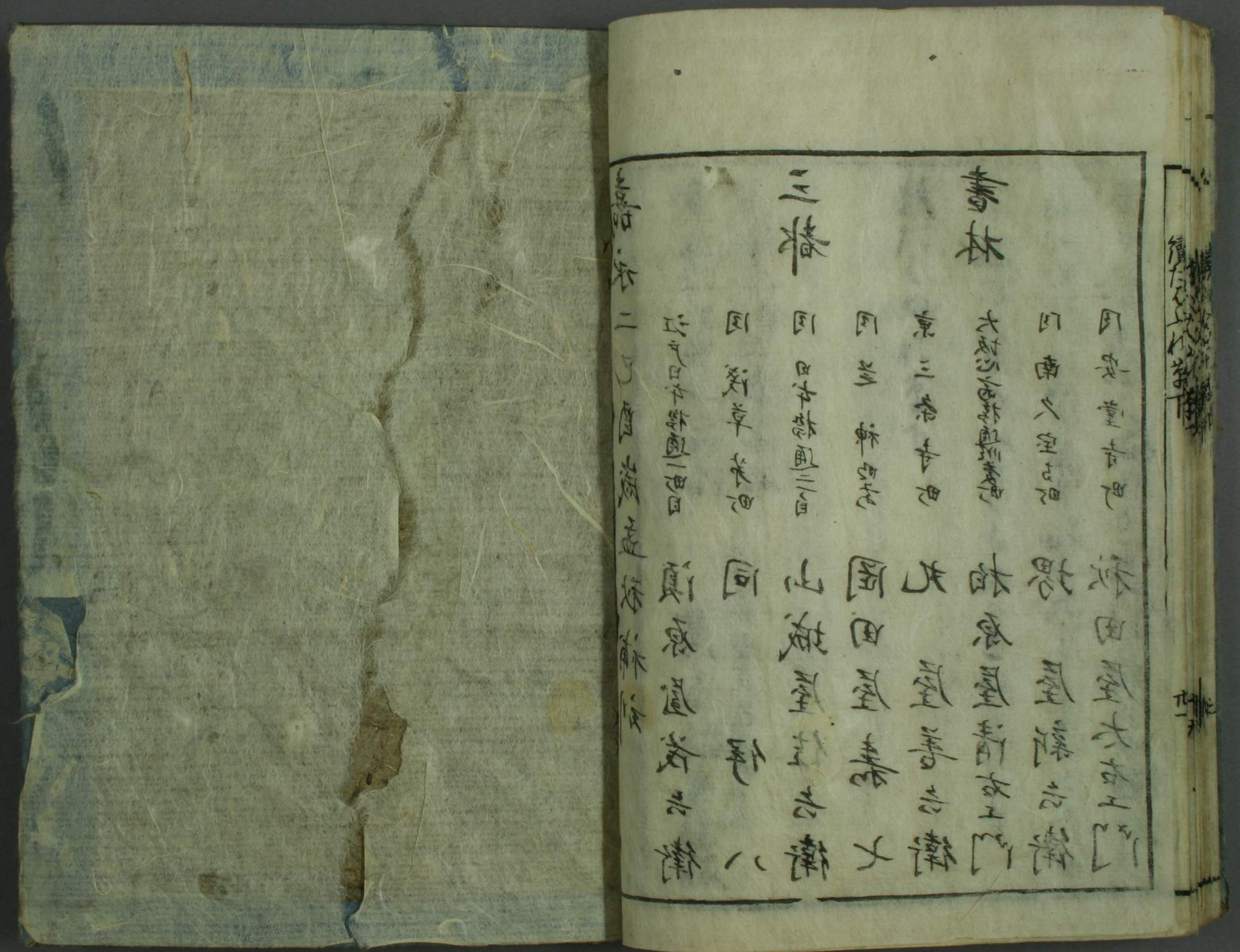
一人腰をすへ右の足と蹈張。左の足もかし
かゞめくゝんゞり。左の臂を張てよと脇よ
突張。時致の絵のごゝくして居るなり。引人ハ
紅比奈の絵のごゝくしてひくよいかど大かれ
人引てをひきぬ法なり。ひゝれる人の右れ足
乃先よて。ひく人の足の指先をとゞるなり。引人
の左の足先とひゝれる人の右れ足先とりあゝ

なり。ひゝきる人右のよこ。ゝ人の左の腕の中
程とおしとめるなり。かくしてくするときは
いゝ程の大力の人よくもひゝきぬるなり
續たゞ姫れ者下

天明元辛丑歳求板
寛政六乙卯年再刻　　京ゝ所松原上ル西側小ゝ屋治兵衛板

嘉永二己酉歳孟秋補刻

三都

江戸日本橋通一町目　須原屋茂兵衛
同　浅草茅町　同　伊八
同　日本橋通二丁目　山城屋佐兵衛
同　芝　神明前　岡田屋嘉七
京　三条寺町　丸屋善兵衛
大坂心斎橋通北久宝寺町　柏原屋清右エ門
同　南久宝寺町　堺屋新兵衛
同　安堂寺町　秋田屋太右エ門

書林